

## 人間活動により犠牲になった

### 鳥獣類のための「鳥獣供養祭」を開催！

平成25年2月24日(日)午後1時から土浦市の大聖寺(住職小林隆成師は本会役員)で160余名の人々を集めて、「鳥獣供養祭」が営まれ、人と動物との共存と世界平和を祈念しました。



この催しは本会と大聖寺、日本野鳥の会茨城県との共催で開催されたもので、(公財)山階鳥類研究所、(公財)日本野鳥の会本部、(公財)日本鳥類保護連盟、(公益社団法人)茨城県獣医師会等23団体も協賛しました。

第一部の法要に先がけ、共催者の代表挨拶の後、大聖寺住職導師の下、職衆7名により本堂「大聖殿」で法要が厳修されました。共催者、協賛者の指名焼香に引き続き、参加者全員による焼香が執り行われ、犠牲鳥獣類の御霊に感謝し、冥福を祈りました。



第二部の講演では(公財)山階鳥類研究所所長の林良博農学博士に「いのちを大切にす宗教と科学」と題してご講演を頂きました。先生は、「科学だけではいのちの大切さを守ることはできない。」として、「命に関して本来どうあるべきなのかを宗教が示し、宗教と科学が一緒になって協働し

ていく必要がある」と訴えられました。プロジェクターを駆使して、大変易しい言葉で、分かりやすく、お話しされて大好評でした。

第三部の意見交換会では場所を代えて客殿書院に移り、林所長と共催3者が雛壇に座り、開催されました。活発な意見の後、林所長から小林住職に質問があり、「兵庫県では増えすぎた鹿による山林破壊があり、環境保全のために、三万六千頭の駆除を行っているが、その駆除に対し、賛否両論があり、その説得に苦慮している。大聖寺の小林住職様ならどのように説得されますか？」との質問があり、住職は次の様に答えられました。釈尊が悟りを開かれた時のお話と、空海の曼荼羅の教理を説明されて、何れも「仏教の教えは中道にあることから、慈悲の心を保って生態系のバランスと環境保全のために、殺生せざるを得ない。」と説明されました。これに対し司会の野鳥の会茨城県会長の池野進氏は次の様に両者の言葉を解説しました。

「林先生は、人間と動物が共生して行くには人には考える力があるから、科学で解決し、科学で納得いかない事は小林住職さんの仏教の中道(中庸)という大切なものがある。この2つを心がければ必ず道は開けると、私は学びました。皆様も同じお考えだと思います。」と結んだ。

そもそもこの供養祭は小林住職が以前から温めていた事で、世界中で様々な鳥獣が人間活動によって犠牲になっている事から、これ等犠牲鳥獣の供養を考慮中の時、たまたま平成23年12月、稲波干拓地で天然記念物オオヒシクイが防鳥ネットに架かる羅網事件が発生しました。幸いにして当会会員の配慮により難を逃れたのでありますが、これを端に予てより問題になっていた霞ヶ浦の蓮田の防鳥網に1シーズン当たり約1200羽の野鳥が架かり命を落としているこの大問題も合わせて取り組み、この「供養祭」をその糸口として問題を解決したいという目論見がありました。生産者との対立を避け、何とか同じテーブルで話し合いが出来ないか?と真剣に考えた結果、この「供養祭」となりました。

当初どの程度の人たちが駆けつけてくれるか疑問でしたが、悪天候の中、予定を上回る方々にご参加頂き、評判も上々でした。この供養祭も回を重ねていくうちには必ず問題は解決するものと考えます。